

第一回企業活性化研究分科会・議事録

<第1回 2007年3月17日 午後13:30~午後16:00 於:専修大学(神田校舎)・2号館>

1. 参加者: 太田、山本、井端、飯高、横山、大柳、星野、渡辺、大野、古山
2. テーマ: 分科会の方向性および太田三郎著『企業の倒産と再生』の検討

3. 討議内容

3.1 分科会の方向性について

分科会設立の経緯、分科会の位置づけ、目的、長短目標の設定、リスク概念の定義など分科会活動の方向性、企業活性化とリスクマネジメントとの関係性等について意見交換を行いました。その結果、次の3点に関して合意されました。

- ・ 企業活性化を軸に派生していくもの、リスクマネジメントを念頭としたものをテーマとしていくこと
- ・ リスクマネジメントと企業活性化の関連性を明確にするために、当分科会でのリスク概念に関するフレームワークの作成を当面の目的とすること
- ・ リスク概念のフレームワークの作成のために、参加者個々のリスク概念に関して、意見交換を通じて、まとめていくこと

3.2 太田三郎著『企業の倒産と再生』の検討

- ・ 報告者: 古山 徹氏(日経メディアマーケティング)

古山氏が太田三郎著『企業の倒産と再生』(2004年同文館出版)をもとに企業リスクと企業活性化についての私見を述べていただきました。

- ・ 配布資料: 『企業の倒産と再生』についてのレジュメ
- ・ 報告内容

本著が指摘する倒産が内包する七つの問題点の解説をするとともに、本著の目的は、「倒産と再生に関する文献を整理すること」、「倒産から再生を目指す企業の時系列的、動的な再生メカニズムの解明」であると指摘している。

本著の構成は、企業倒産(第Ⅰ部)、企業再生(第Ⅱ部)、事例分析および実態調査分析(第Ⅲ部)の大きく三つの柱からなっている。第Ⅰ部(第1章~第3章)では、再生に必要な倒産原因を倒産と再生の連鎖の観点から体系的の整理、第Ⅱ部(第4章~第7章)では、倒産から再生の可能性を判別するための再生予測構築モデルの検討、第Ⅲ部(第8章~第11章)では、再生理論の検証と再生に必要なファクターについての検討がされている。

最終的な結論として、以下の5点をあげている。

- 倒産は、必ずしも経営活動の終局点ではなく、ひとつの通過点である。
- 倒産と再生は、密接に連鎖しているものである。
- 倒産から持続可能な再生に至るプロセスとメカニズムの解明に商店を置いた独自の研究フォームを有している。
- 再生の基本要件を満たした上で経営者が経営の基本機能を適切な再生手法で回復すること

で再生は実現できる。

- 倒産から再生への可能性は、定量要因だけでなく定性要因の評価も必要である。

以上が、本書の概要である。

最後に、本著に対する古山氏の私見が述べられた。ポイントは以下の2点である。

- 倒産は、必ずしも死を意味しているのではなく、企業の基本機能を回復させる適切な再生手法を適用することで、企業は再び経済活動を続けることができる。つまり、再生要因を特定する本件研究は有益な研究である。
- 再生予測モデルにおける財務指標の選択について、セグメントの問題を考慮すべきと指摘している。

・質疑応答・意見交換

報告後、質疑応答および意見交換が行われました。主な内容は以下の2点です。

- 再生の終結とは、本著では、民事再生法を適用し裁判所において終結した時点をさしているが、民事再生法を適用しない場合などは、どのように考えるべきであるのか。
- リスクの範囲をどのように設定すればよいのだろうか。リスクだけではなく、**opportunity**も含めたところまで、リスク概念を拡張するほうが、より有益なのではないだろうか。

(文責：菅原智久)